

# 浄土での再会を信じて

勸進だより 二号

吉田 一心 (よしだ いっしん)

発行者 吉田一心師(新寺建立)を支援する会  
発行日 平成十八年三月一日

南無阿弥陀仏

私は浄土宗僧侶・吉田一心と申します。

昭和十九年生まれですので六十一歳になりました。現在、小笠原諸島の父島で新寺建立に向け勤めております。この二年間、多くの方々の援助・激励に支えられ勸進行を歩んでまいりました。

「なぜ、僧侶になったのですか？」

「なぜ、小笠原への道を選んだのですか？」

これは、お出会いする皆さまから、多く頂いたご質問です。その答えを整理しながら、現在の私の思いをお伝えしたく思います。

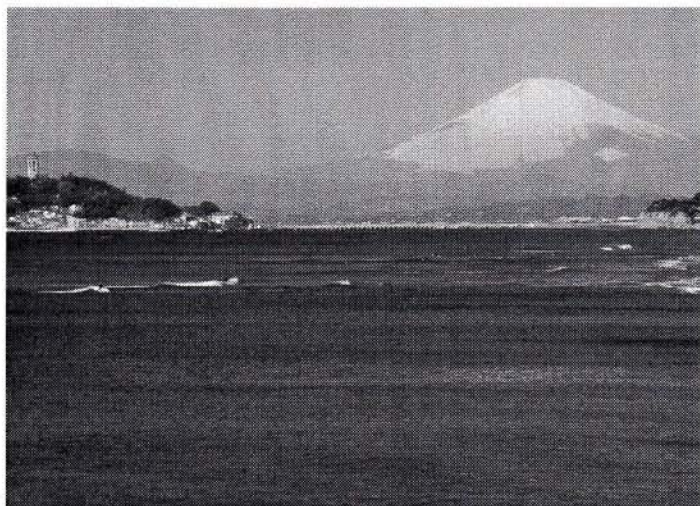
私は大学時代の四年間、神奈川県江ノ島海岸で監視員をしていました。当時は人出が多くお酒を飲んで泳いだり、無茶をする人もあり、水難事故も度々でした。多くの

人を救助しましたが、溺死の現場にも立ち合ってきました。ご遺体の損傷がはげしい

場合は、その前で足が動かないこともあり、水難事故の現場は当時二十歳前後の私にとって衝撃的なものばかりでした。そして、今も心から離れない出来事があります。

ある日、事故から三日後にご遺体が海より引き上げられました。あまりの損傷に、私はそのご遺体に近づくことすらできませんでした。しかし、亡くなった方のお兄さんが、頭を撫でてあげながら、「苦しかっただろう。冷たかっただろう。」と声をかけられたのです。他の現場でも同じようなご家族の姿がありました。肉親の方の行動は他人とは全く異なるのです。この体験が今も私の心にはつきり残っています。

その後、サラリーマン生活を経て救急救命の会社を興し、その縁で数年後ダイビングインストラクターとなりダイビング業界



稲村ヶ崎より江ノ島と富士山を望む

に入るようになりました。

当時、ダイビング業界は勃興期であり、私が勤めたところは多くのダイビングインストラクターやダイビングショップを教育

する組織でした。技術とともに経営の指導等で全国を駆け巡る日々を過ごしました。

四十代なかばに差しかかり、私は休暇をとって少年期を過ごした北海道にむかいました。四年生までお世話になった小学校を訪ね周辺を歩いた時私の心に、先生方をはじめ地域の人や先輩、多くの方々のおかげで今日があるのだなあ、と感謝の念がフツフツとわいてきました。その地においてその夜、私は僧侶になることを決意いたしました。

なぜ、僧侶になったのか？と問われた時、

うまく一言では表現できませんが、このように学生時代のいろいろな経験、社会人としての感謝の念、そして企業という限りない競争の世界に身を置いていたことなどが私を今に導いたものと感じています。

基本的な修学を終えて正式な僧侶の資格を戴いたのが四十八歳でした。二年後、ご縁があり三重県の南龍寺というお寺の住職となり、約八年間勤めました。檀家さんは多くはありませんが、良き人々に囲まれ充実した日々でした。「なぜ、その南龍寺を出て、小笠原への道を選んだのか？」とよく聞かれます。

まず第一はいい後継者がすでに決まっていたことです。私がいなくても南龍寺は安心です。第二は私の環境です。子ども達はすでに成人しています。そして妻は今から五年前に亡くなりました。单身

遠い島に住まいを移すことも可能です。小笠

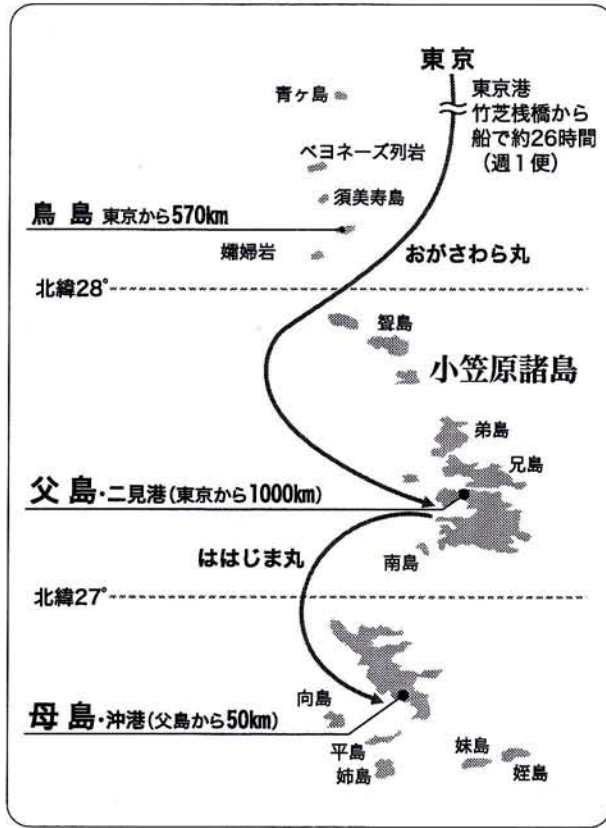
原は僧侶が不在で、島の人々が困っておられると聞いていましたので私のような立場なら、むしろそこに行くべきだと思い、決心をしました。

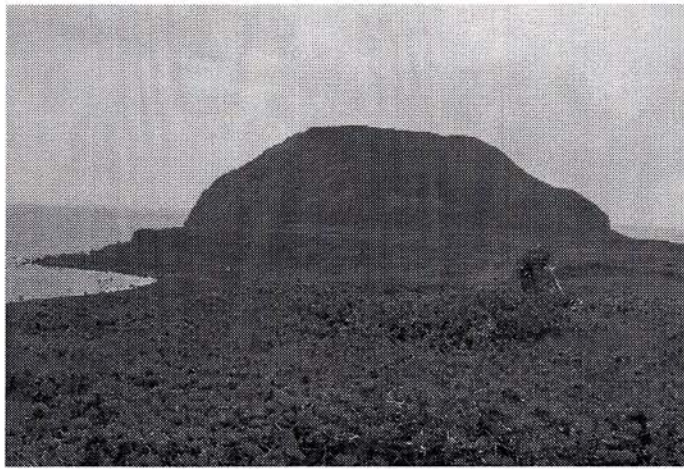
今、私が住んでいる父島から南へ二五〇kmには硫黄島があります。昭和二十年、日本軍とアメリカ軍の激戦がくりひろげられた島です。二〇、一二九人全員が玉砕、その内、約一二、〇〇〇人の方々のご遺骨はいまだに収集されておりません。毎年、遺骨収集団が尽力されていますが、長い時間の経過により、収集の作業も難しくなっているとのこと。

現在、硫黄島には一般人は入れません。

自衛隊の基地があり、戦闘機の発着訓練が行われています。旧硫黄島の島民が、墓参を許されるのは年に一度です。以前、私はその墓参船に乗せて頂いたことがあります。帰路、船は島をゆっくり一周回り、汽笛を響かせます。お年を召した旧島民やご遺族の方々が花束を海にささげ、手を合わせておられました。

私はその船上で、玉砕された二〇、一二九人の方々全員にお十念のご回向を勤めることを考えました。(私たち浄土宗では十回





すりばちやま  
硫黄島の摺鉢山

(山頂の形が変わるほどの激しい砲撃を浴びたといわれる)

の南無阿弥陀仏、つまりお十念を大切にいたします。) そうすると、二十万回以上の念仏行です。私一人でも勤めることは可能ですが、出来ればお越し頂ける和尚さんと声を合わせて、ご回向を捧げたく思います。そのためにも、硫黄島に近い小笠原父島にお寺がほしいのです。

冒頭に申し上げましたように、新寺建立の発願をして、二年が過ぎました。全国の

多くの皆さまにご協力頂き、勸進行を勤めています。また、全国各地でここに書いてあるような発願の思いを直接お話し、法話も勤めました。宿泊の多くはホテルを利用しました。以前の仕事で旅生活には慣れていたつもりでしたが、長期に亘るホテル生活、そして移動は少々大変でした。お笑いになるかもしれませんが、朝、目が覚めた時、自分が今どこに居るのか解らないことが幾度かありました。予定表を開き、今日どこへ行きどなたと会うのかを確認してから一日が始まるようなことでした。父島の私のアパートは広くはありませんが、とても恋しく感じたりもしました。

しかし、こういう全国を回る予定は、多くの方々のご努力のおかげで組まれていきます。宿泊・交通・空き時間の利用まで、細部に配慮がなされています。ふり返れば、そのことが身にしみる思いです。

そしてまた、あるご住職はホテル住まいばかりは大変であろうと、お寺の一室を開放してください、いつでもどうぞ、と仰ってくださいました。朝、一緒におつとめをし、朝ごはんもご家族とともに囲み、一日の活力を頂戴しました。心に刻まれるご恩です。

各地のご寺院で檀家さんの前で法話を勤めさせて頂く中、私は法然さまのみ教えをひたすらお伝えいたしました。先に亡くなられた大切な方と、浄土で俱ともに再会できるお念仏の有難さを重ねて重ねてお伝えいたしました。お見受けすれば、本堂にお参りのほとんどの方々が、肉親との死別を体験されておられると感じました。お話ししてそのことがこちらに伝わってくるのです。檀家の皆さまと一緒にみ教えを学び、お念仏を称える中で私自身も励まされる思いでした。

私は法然さまのみ教えに出合えて、本当に良かったと思っています。そして浄土宗の僧侶になって本当に良かったと思っています。新寺建立にむけて、まだまだ困難やトラブルもあるうことは覚悟しています。しかし、自分の信じた道をしっかりと進もうと、今、改めて思っています。

今後ともご支援、ご指導の程をよろしく  
お願い申し上げます。

台掌十念

現住所

東京都小笠原村父島字宮之浜道

レモンハウス一〇四

## 吉田一心師（新寺建立）を

### 支援する会より

吉田一心さんの勸進行開始と同時に、支援する会が発足し、多くの方々とともに歩んでまいりました。世話人も一心さんに随

行中、傍らでいろいろなお話をうかがいました。この度、勸進行を始めてから二年ということもあり、一心さんに改めて（思い）をまとめていただくようお願いし、掲載し

「跡」と題して平成十六年九月に発行しております。）

また、各地の勸進先においては案内役をかつて出てくださる方に変えてお世話になりつつ、支援活動が進められました。勸進行も全国に及んでおりますので、そうした地元の方のご尽力に大いに助けていただきま

ましたのがこの『勸進だより二号』です。

（『勸進だより一号』は「念仏の声するところ」が法然さまのご遺

ことを、期待したく思います。引き続き多くの皆さま方のご支援・ご指導を心よりお願い申し上げます。

吉田一心さんの勸進行・支援についてのお問い合わせがございましたら、左記の事務局（FAXまたは携帯電話）までお願いいたします。

世話人記 合掌

#### 勸進だより二号 発行

吉田一心師（新寺建立）を支援する会

【アドバイザー】石田祐寛、白川元昭、

林田康順

【世話人】伊藤法雄、日下部謙旨、

森 俊英

【事務局】〒590-0964

大阪府堺市新在家町東

4-3-15（正明寺内）

森 俊英

FAX 072-222-0797

携帯 090-6979-2661

【寄進受付郵便振替口座】

00970-4-277384

加入者名 吉田一心師（新寺建立）を

支援する会



勸進中の吉田一心さん JR草津駅にて（滋賀県）

した。当紙面をもつてお礼申し上げます。

一心さんは、今年から出張の回数や日数を減らし、新寺の建立地さがしのため島にいる時間を多くしたいとのことでした。それでも、年に幾度かは勸進行と布教のための出張もありましょうから、これから更に全国の皆さまとのご縁が広まる